

THE KREMLIN WATCHING

特別寄稿・中嶋嶺雄(東京外国語大学教授)

ソ連の ゴルバチョフは ここが違う

政敵ロマノフを斬り、グロムイコを棚上げし、チーホノフを引退に追い込む。その一方で新政策を果敢に実行し、華麗な首脳外交を展開する。それも書記長就任8カ月の短期間でやってのけた男、ミハイル・ゴルバチョフの素顔は？

モスクワの北部にV・D・N・Kh(国民経済成果博覧会場)があり、その手前に、コスモス・ホテルという非常に瀟洒なホテルがある。これはモスクワ・オリンピックのために新しくつくられたホテルだが、ソ連の玄関口として新装なったシエレメチエボ国際空港と並んで、おそらくモスクワを代表する近代的な建物であろう。ところが、この2つの建物は私にとって、今日のソ連社会がいかに立ち遅れているかを象徴する場であると思われる。

彼は余りに若かったため目立たず、ブレジネフにも狙われなかった

私はコスモス・ホテルにしばしば滞在して、日ソ円卓会議などに出席したけれど、一般に国際会議であれば非常に手順よく進行し、会議のペーパーなどはすぐコピーして配布されるのが普通だが、ソ連へ行くと、会議のペーパーのコピーをつくるのが大変で、1日かかってもコピーができない。機械が焼けてしまつてどうしようもなく、やつと出てきたコピーも読めるか読めないかという程度で、結局、代表には満足なペーパーのコピーが渡らずに終わることが多い。

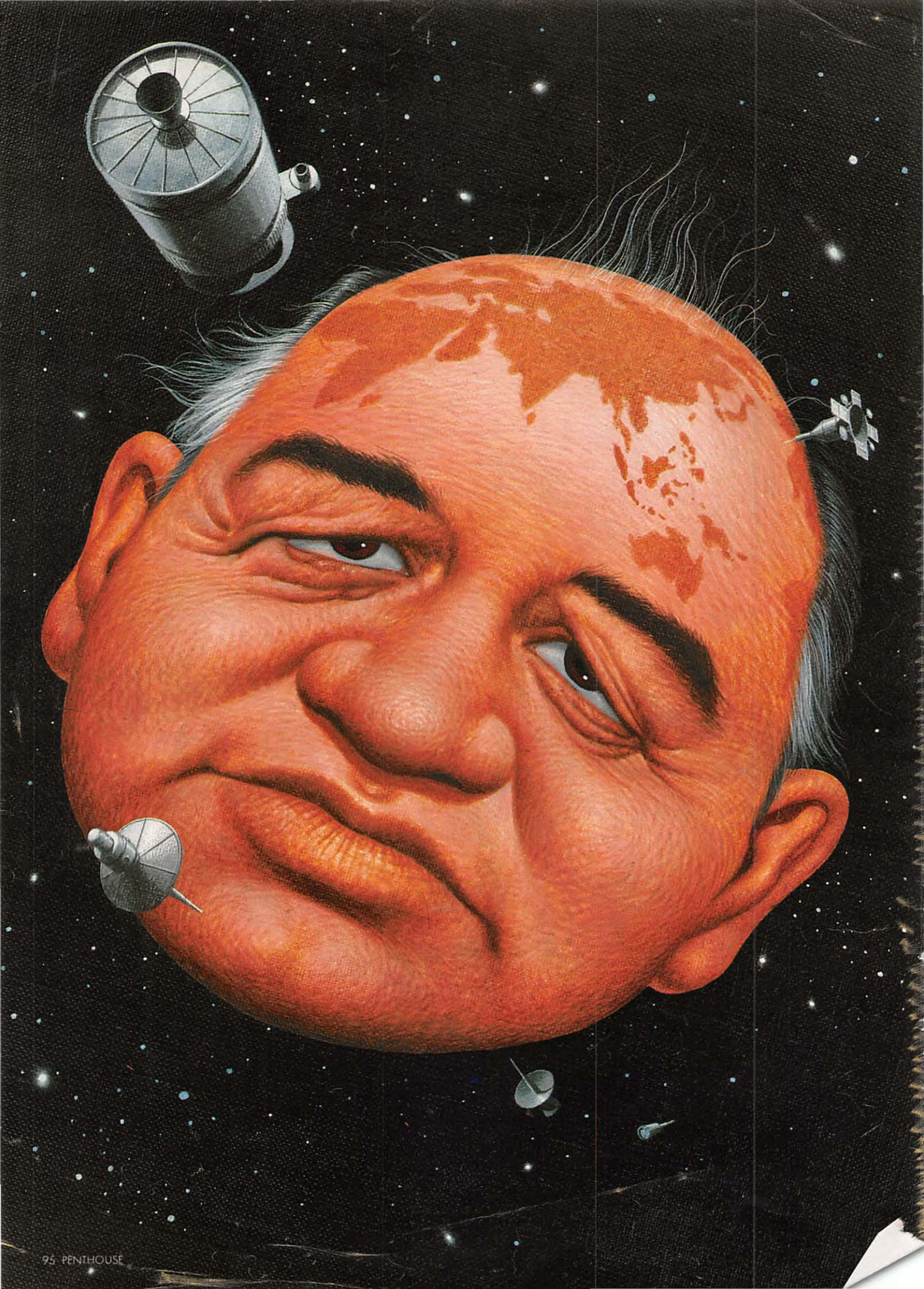
そのコスモス・ホテルで会議をしているときに、窓外の博覧会場を見ると、ソ連製ロケットの大きな模型が天へ向かって飛翔する形で、堂々と立っている。つまり、先端ミサイル技術、ロケット技術を大きく誇示しているながら、日ソ円卓会議のような半ば公的な国際会議においてすら、ペーパーのコピーをつくることもできない。これは今日のソ連社会の姿をそのまま映しだしているのではないか。シエレメチエボ空港はたいへん立派になつたが、照明がほとんどついていない。照明機器はついているのに、電力不足で全部を点灯

できないのだ。照明があれば非常にスマートな空港ロビーになるのだが、いつも暗く、なんとなく陰気である。しかも空港の通関手続きも、2時間ぐらいで出てこれれば幸運なほうで、場合によっては3時間も待たなければならぬ。ソ連社会はまさに、ウエイティング・ソシアリズムであり、何をやるにも待たなければいけない。何を買うにも行列しなければいけない。その実態と近代的な空港の建物との落差は余りにも大きい。

この病理はブレジネフ時代からずっと続いており、ソ連のシステムはいまや完全に硬直化してしまつた。この矛盾をともに受け止めて、本格的に改革を進める指導者を、ソ連の国民は待望していたのであろう。

18年にも及んだブレジネフの時代が終わり、アンドロポフが政権の座に就いたとき、アンドロポフへの国民の期待は非常に大きかつた。事実、アンドロポフは幾つかの改革に着手したが、しよせん15カ月の短命に終わり、改革が実行されたとはいえなかつた。チエルネンコは単なる中継ぎにすぎず、問題にならなかつた。

そんな状況のときにゴルバチョフが登場したのである。まさに時代の申し子といえるだろう。時代が彼を要求し、彼も時代に乗つた。そういう意味では、非常にラッキーだつた。彼は野心的な改革案を持つていながら、ブレジネフのときは幸いにして若すぎたので、それほど注目されなかつた。ブレジネフにしても、ゴルバチョフが脚光を浴びるリーダーにのし上つていたら、彼を斬り捨てただろう。そして病弱なアンドロポフがやろうとして果せず早死にしてくれたことも、彼にとってラッキーであつた。その意味では、アンドロポフ時代がなければ、ゴルバチョフの時代はなかつたであらう。



“赤いケネディ”は途方もない型破りのことをやるのではないが

いまアメリカには、米ソ首脳会議に直面して、種々のゴルバチョフ論があるが、コミッサール・ケネディ（赤いケネディ）という呼び方が最もよく彼の特徴をとらえている。ケネディが出てきたときのアメリカの時代風潮とやや似ているからだろう。ゴルバチョフは年々若いし、非常にスマートであり、ケネディ大統領と似た颯爽たる登場であつた。ライ

サ夫人もジャクリーヌ夫人に擬せられるかもしれない。スタイルもよくたいへん美人である。夫人のセンスのよさは、今回のフランス訪問に見るように、ビエール・カルダンやサンローランの商品を身につけたり、それを批評したり、実に鮮やかだつた。ソ連のこれまでの指導者の中で、夫婦そろつてバリ・モードにさつとはまっていた人はいない。

いわば、ソ連もいよいよイメージの時代に入つてきて、彼はそのイメージ時代の申し子である、という点を強調していいだろう。アメリカのソ連問題専門家の第一人者であるハーバード大学のアダム・ウラム教授は、新機軸を出すという点ではケネディと同じだが、このままいくとゴルバチョフのほうがケネディ以上に途方もない型破りのことをやり遂げるのではないかと分析しているが、私もなんとなくそんな気がする。

彼の書記長就任以来の、8カ月間を振り返つてみると、非常に印象的なことを3つやっている。まず第1点は、社会が非常に病んでいて労働効率が悪いところへもつてきて、酒ばかり飲んでいるアル中が多かつたが、これを一掃したことだ。モスクワへ行つてみればすぐわかるが、これまではアル中が街にふらふらしていた。そういう光景が全くなつたのである。

第2点は、経済の建て直しを非常に積極的にやっていることだ。ゴルバチョフが権力を握つてから8カ月、ソ連の工業生産はかなり上向きになつてきた。これはいかにいままでの社会経済が硬直化していたかを示すものであろう。

第3点は、思い切つて人心の一新をはかり、

THE KREMLIN WATCHING

クレムリンのトップからはじまつて地方の書記にいたるまで、約60%を8カ月で入れ替えてしまったことである。並の人物ではなかなかできないことは当然としても、これは彼の権力基盤がかなり強いことを示すものでもあるだろう。

社会、経済、政治、この3つの分野にわたつて、まさにソ連はこれまでにない時代を迎えはじめている、という気がする。

アンドロポフ体制下で頭角を現した若手を次々と仲間引き込んだ

これをもつと具体的に見てみよう。まず人事面である。ゴルバチョフが書記長に就任したときには、たしかにゴルバチョフはスマートかもしれないが、どうせソ連社会のシステムによつてはねつけられてしまふであろう、党官僚の抵抗にあうであろう、という意見が非常に強かつた。ところが現実には逆で、彼は人事刷新を着々とやり遂げている。これはまさに驚嘆に値することだ。

まず、彼はライバルであるロマノフ政治局員を追放してしまつた。また年功だけで首相のポストを占めていたチーホノフを更迭し、さらにグロムイコ外相を最高会議幹部会議長に擧上げた。4半世紀以上にわたつてソ連外交を牛耳つてきたグロムイコはゴルバチョフにとつてはやりにくい相手だつたのだと思う。ちょうどダレスの時代からアメリカの国務長官が同じ人物だつたら、新任の大統領はどんなにやりにくいか考えてみればよい。ゴルバチョフとしてはグロムイコにはひきさが

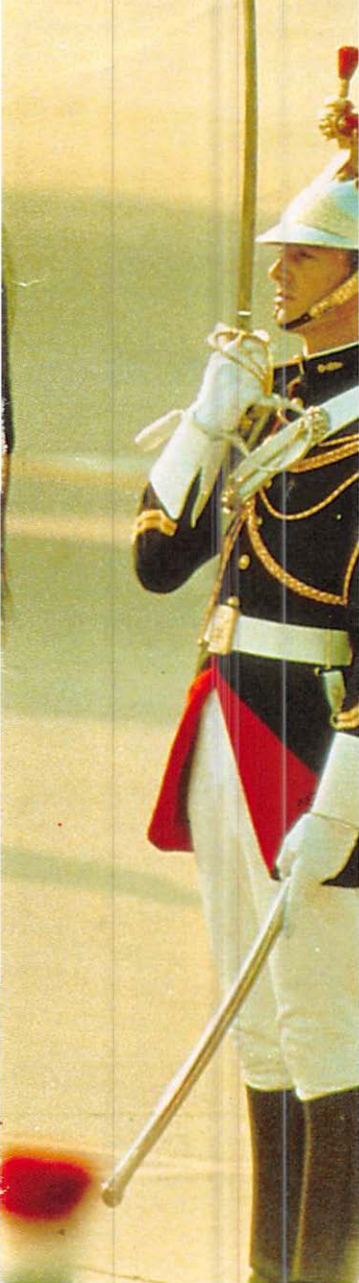
つてもらう以外、どうしようもなかったのである。そこで、ロシア共和国の北コーカサス（ゴルバチョフの出身地）を越えたとすぐ南にあるグルジア共和国から、シユルワナゼを中央に引きあげ、外務大臣に抜擢した。約20歳の若返りである。

しかも、外務大臣を新しくただけでなく、この10月中旬には、ゴスフラン（国家計画委員）議長で74歳のバイバコフを更迭し、タルイジンという56歳の中央委員を任命した。彼はまもなく政治局員候補に昇格したが、これも外交と並んで、まさにソ連のガンになつて国内経済を、ゴルバチョフが強烈に意識してのことである。

さらに、外国貿易相を、これまでずっとやってきたバトリチエフから60歳のアリストフに替えた。これも17歳若くなつた。いまソ連の石油生産量は落ちており、自らの石油を売つて同盟国をひきつけることがソ連はできなくなつてきた。それだけに、ソ連にとつても外国貿易はこれから非常に重要なのである。まだ軍首脳人事が少し残っているが、これでクレムリンにおけるゴルバチョフ体制は、ほぼ固まつたと見ていいだろう。

彼のやり方は2つある。まず、上から権力を行使するだけでなく、一種のサロンをつくり、新ナンバー2のリガチョフ、新首相のルイシコフ、KGB（国家保安委）議長のチェリコフ、ロシア共和国首相のウオロトニコフ（いずれも政治局員）といった、ともにアンドロポフ体制の中で頭角を現してきた人たちを、次々にゴルバチョフ体制の中に仲間として引き入れることである。

もう一つは、ブレインをつくることである。たとえば、経済政策では、アガンベギャンというノボシビルスク経済工業生産組織研究所長をモスクワに呼んで、彼の意見を重用し





'85年9月フランスを公式訪問した際ミッテラン大統領とともに空港で儀仗兵を閲兵するゴルバチョフ書記長



サッチャー英首相はゴルバチョフを高く評価し「私は彼が好きだ。彼とならうまく仕事ができそうだ」といった

夫の訪仏に同行したライサ夫人。モスクワ大学で哲学を修めた才媛で年齢は51歳という



ている。これはソ連の学者がみな認めるところであつて、彼は、いわば中央集権システムを分散し、より柔軟な経済システムをつくらうという、非常に野心的な政策を出した人物である。

それから、アメリカ・カナダ研究所のアルバートフ所長を対米政策のブレインにしている。それに「ブラウター」のアファナーシエフ編集

長、ブルラツキー「文学新聞」の政治評論員らもそうである。さらに、いわば政策広報担当ともいえる党宣伝部長に、ヤーコブレフという科学アカデミー世界経済国際関係研究所所長を抜擢した。こうしたブレイン・トラストをつくった一方で理論武装しているという点は、これまでのソ連の指導者になかったことである。

ソ連社会の大きな変化はフルシチョフ時代にもあつた。しかしフルシチョフにはそういつたブレインもいなかったし、第一、理論がなかった。いわばウクライナの田舎出のジャガイモ爺さんが、スターリン体制を弱すために暴れまわったということであらう。その点、ゴルバチョフは違う。

彼はフルシチョフとは 一味違う「第2の雪解 け」を期待されている

ちょうどケネディが、ベストでブライテス
トなブレーンを持って(結局、ヴェトナム戦争
で失敗するのだが)、非常に知性的な政治をや
りはじめたのと似ている。アンドロポフも、雰
囲気としてはそういうものを持っていたが、
なんといつてもKGBの議長という影が彼に
はつきまとった。しかしゴルバチョフは、め
ずらしいことに公安関係のポストについてこ
とはなく、党のエリートコースを一貫して歩
んだインテリ党員中のインテリである。これ
までのように共産党のイデオロギーだけ、あ
るいは、秘密警察を背景として上から押さえ
つけるのと違う。これが非常に新鮮さを出し
ているカギだ、と私は見るのである。

いま、ソ連には新しい風が吹き始めたとい
う雰囲気があり、皆やはりこの時代に乗って
いこうという、ちょうどケネディのときの
一種のなだれ現象、バンドワゴン現象が起こっ
ているような気がする。それが彼にとつてま
すますうまい方向に作用している。願わくば、
やりすぎたり急ぎすぎて、つまずかないこと
である。

彼には持ち時間がたつぷりある。私の見る
ところ、少なくともあと10年はやるのではな
いか。あと10年やつたところで64歳、それ
でもまだ時間がありそうである。

つい最近、彼は86年の27回党大

会に向けてソ連共産党新綱領を採
択した。この新綱領の目玉は、なん
といても「科学技術革命による
国民経済の発展」という、いわば第
3次技術革命であろう。コビーひ
とつどうしようもない、コンピュ
ータもどうしようもなく動かない
一方、核ミサイルだけは威容を誇っている
というアンバランスな、ソ連社会のいわば、ど
うしようもない、点についての危機意識をゴ
ルバチョフは持っている。少なくともいまま
での指導者と違うのは、これではもう駄目な
んだという意識を一方に持ち、しかも改革を
やるには上からだけでは駄目だということを知
っている。だからこそ、下のほうの書記も
代えてしまい、自らコルホーズや地方の工場
に出ていって、かつて毛沢東が華やかなりし
ころに中国でやつたように、大衆路線につ
てグラスルーツにおいていっているのである。
インテリ党員はとにかく頭の中だけで肥大
するが、そこを避けようとしているところも
ある。つまり、ソ連の持つている、ある意味
での強さも知つていながら、それを根底から
脅かすような脆弱性に対する認識を持つてい
るのである。

THE KREMLIN WATCHING

彼はしきりに科学技術について語る。そし
て、国内のシステムが硬化化していないかと
うか、あるいはソ連の外交政策が効果的であ
るかどうか、そのためにはソ連がコンピュ
ータやエレクトロニクスなど先端技術時代に立
ち向かっているか、そのためにはどうしようもない、
ということに強調しているが、特にゴスプラ
ン議長や外国貿易相の更迭は、これまでソ連
は自らの製品を世界に売ったことがないので、
世界に売れる製品をつくらなければいけない、
石油だけ売つていても駄目だという意識から
であろう。

その意味では、ソ連にこういう指導者が出
てきたことは非常に特徴的であろう。
そのバックグラウンドは、私の見る限り、
赤いケネディ、といわれる彼のユニークさに
求められるが、これはかなり若い時分から発
揮されていたと思われる。

いうまでもなく、クレムリンの中では彼が
レーニン以来はじめてのモスクワ大学出身者
である。しかも彼は非常に優秀な成績で卒業
したロイヤル(法律家)である。

彼は学生のころからやり手といわれ、頭が
切れたにもかかわらず、人の意見をよく聞き、
人当たりがいいという。同級生の回想などい
ろいろあるが、彼を悪くいう人はいない。ア
メリカに亡命したソ連人たちがさえ、ゴルバ
チョフに対する評価は非常に高い。

彼が故郷スタヴロポリの第一書記になつた
のは39歳のときである。従来、ソ連の地方書
記は大部分がテクノクラートが農民出である。
その点でも彼はまったく違つていた。

さらに若いにもかかわらず、党の書記とし
て様々なレベルの党務
の経験を積んでいる。
もう一つは、なんと
いってもソ連は農業問題

イデオロギーや共産党 を必要としない世代が どんどん増えている

いま、ソ連の若者のあいだで大流行の、ア
ラ・ブガチエウアとリサイタル、グループ
「アレクサンダー・ユードフがリーダー」の音
楽は、非常にナウイニュー・ミュージックだ。
フルシチョフの時代に、雪解け、といわれた
が、これはスターリン体制に対する一種のイ
デオロギー的な反体制だった。いまのソ連社
会の若者たちのニーズは、反体制ということ





記者団の質問に答える
ゴルバチョフ書記長。
「我々はアメリカのSDI
計画に反対する。それ
は軍拡への道に他
ならないからで

自体が古いというよう
な、もつと現代的なフ
ィーリングである。も
つと風通しがよくなり
スタイルがファッショ
ナブルになり、日常生
活をエンジョイできれ
ばいいじゃないか、と
いうことである。事実、
日常生活が満足されれ
ばいい、イデオロギーも

共産党ももう要らない、という世代が実に多
くなつてきている。だから、ハスキーでビー
トの効いた女性歌手、アラ・ブガチエーヴア
の音楽が若者のあいだにあんなに流行ってい
るのである。そういうことを考えると、ゴル
バチョフには、従来の「雪解け」を超えた新
機軸を期待されているのではないか。そうい
う意味では、フルシチョフともアンドロポフ
とも違う。
いずれにしても、揺れが大きくなればなる
ほど歯止めがかかる。かつて、雪解けに対す
る揺り戻しもあつた。そのへんが今後の彼に
とつて一番の問題であろうし、彼、ゴルバチ
ョフの正念場はこの2、3年の間にくるかも
しれない。



歓迎夕食会でミッ
テラン仏大統領夫
人とおしゃべり。
フランス料理の味
についてか、それ
とも女房自慢？



フランスの自動車
工場を熱心に見て
回る。ソ連製の乗
用車に比べて乗り
心地は如何

photo／オリオン、PANA